

週刊誌やテレビのバラエティー番組などで良く目にする「ランキング」。詳細な調査データをもとに格付けしたものもありますが、中には基準の不明で根拠のないようなものもあります。

日本人はランキングを好むといわれますが、古来より行なわれてきた占いなどによる運勢の順位付けや、相撲に代表される様々な番付の文化が、その根底にあるように思われます。

格付け評価が生かせるような場合、「ランキング」は有益ですが、対象によっては評価すること、で本来の目的が達成されなくなるものも少なくありません。

例えば、医療技術等の良し悪しを評価する「病院ランキング」などは、発表されると高評価の病院に患者が多く集まり、低評価の病院では患者が減るでしょう。患者が増えれば、多数のオペをこなしていくために細やかなケアが難しくなり、患者が減つてオペの経験が不足すればいつまでも腕は磨かれませんが、「評価」を控えなければならぬ分野は数多く存在するでしょう。

その最たるものとして、先生や師匠という学びの道の指導者に対する生徒や弟子による評価は、その指導者に対する不利益よりも、学ぶ側が本物の学びを得ることが出来ないという不利益につながっていくのです。

神戸女学院大学教授で思想家・エッセイストの内田樹氏は、「人が学び始めようとするその時、就いて学ぶべき師を正しく選択できるよう、師たちを客観的に適正に格付

## そのままに受けて 自分を一変させる



けできる予備的能力を要求されたなら、人は一生学び始めることができないうら」と言います。

さらに「私たちは、これから学ぶことの意味や有用性を、学び始める時点では言い表わすことができない。それを言い表わす語彙や価値観を、まだ知らない。その『まだ知らない』ということが、それを学ばなければならぬ理由である」とも論じます。従って先生や師匠などを、その道に精通していない一般人が評価して格付けすることは、学びの構造から見て不可能です。評価の高い学校や有名な師匠を、これから学ぼうとする側が、「ランキング」をもとにして経験知や常識の範疇で選択してしまえば、知らない世界を知って大きく高く飛躍するチャンスを手放してしまうことになりません。

倫理研究所の創設者・丸山敏雄は「物を学ぶ秘法は、何も考えず、ただただ教えられる通りに、全てをそのままに受けて、何の疑いも持たず実行することである」(『純粹倫理原論』第二章「学道」と書き記し、無心・虚心の道を推しています)。「純粹倫理」を基底にした倫理法人会活動は、多くの会員諸氏にとって、いわば未知・未踏の世界です。既存の経営に関する学びとは異なる部分もあり、戸惑いもあるでしょう。しかし、だからいいのです。だからチャンスなのです。過去の経験や常識を超越した世界がドンと待ち構えています。目の前の学びをそのまま受け、そのまま実践し、自らの力に変えていきましょう。